



令和元年度 海洋水産資源開発事業 ＜定置網：佐賀県玄海地区＞の調査結果概要



調査船：大泊大敷：恵比須丸（12トン）

高島大敷：第一高大丸（3.1トン）

第二高大丸（3.1トン）

調査期間：平成31年4月～令和2年3月

調査海域：佐賀県玄海海域（唐津湾および東松浦半島沿岸）

本調査の目的

佐賀県玄海海域（佐賀県唐津市：図1）を対象として、漁海況情報に基づく対象資源の合理的な利用方法の提案，ならびに漁場環境に適合し，かつ省人・省力化に対応した漁具による操業効率化の技術実証を行う。また，生産から流通・販売までを通した一体的な調査を行うことで経費の削減と漁獲物の価値向上等を図り，小規模沿岸漁業者が持続的に利益を生み出すための仕組みを提案する。このことにより浜全体での労働生産性の改善を図り，沿岸漁業の持続性を確保できる経営モデルの提提を目的とする。

本年度調査の主な成果等

(1) 主要な定置網4ヶ統（大泊大敷，宮岬大敷，村張大敷，高島大敷：図1）に潮流計と水温塩分計を設置して，当海域における海洋環境モニタリング網を整備するとともに，漁獲量と海洋環境の関係性を把握するためのデータ取得を開始した（図2）。今後，これら漁海況のリアルタイム配信システムを構築し，操業の可否判断等による操業効率化を目指す。

(2) 大泊大敷（図1内の赤枠）を対象として，潮流による網の吹き上がりや沈み込み状況を把握することで，漁獲量の増化に向けた漁具のあり方と，操業方法の改善に資する情報を得た。第二箱網と第一箱網それぞれに設置した深度計データを解析した結果，漏斗鼻と半立て中央の網が頻りに吹き上がり，これら部位の深度差が小さくなって互いの間隔が狭まることで，入網した魚の逃避が生じる可能性が示唆された。今後は潮流と網容積の関係について詳細な解析を行うとともに，ピンガー調査による魚群行動の情報取得を行い，漁場環境と操業実態に適合した漁具改善を提案する予定である。

(3) 漁獲物の高付加価値化に向けた品質評価基準の入手および販売形態の検証を行った。大泊大敷で漁獲されたマアジの粗脂肪含量は，6月に最高値（平均8.4%）を示した。また，小型マアジはサイズ選別を行い，養殖向け種苗として販売することで漁獲収入が向上する可能性があることを示した。

(4) 生産と流通が双方向で事前に情報共有を行い，販売機会の選択肢を増やして収益性の向上をねらいとするICT生産・流通システムの構築に着手した。今年度は漁獲情報入力機能，市場の荷受け・競り機能のタブレット端末入力画面を設計した。次年度は需要確認・事前取引の機能を追加し，漁業者や市場関係者らによる操作試験を通じて機能の改良を行うとともに，(1)で整備を進めている漁海況のリアルタイム配信システムとの連動とも併せ，浜全体の生産性改善に取り組む予定である。

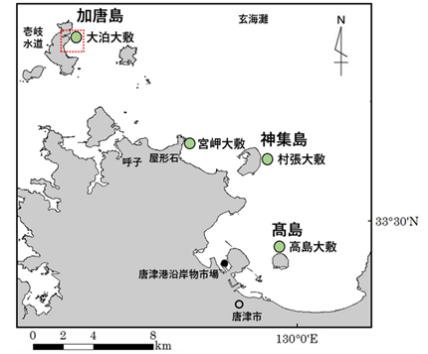


図1 調査海域

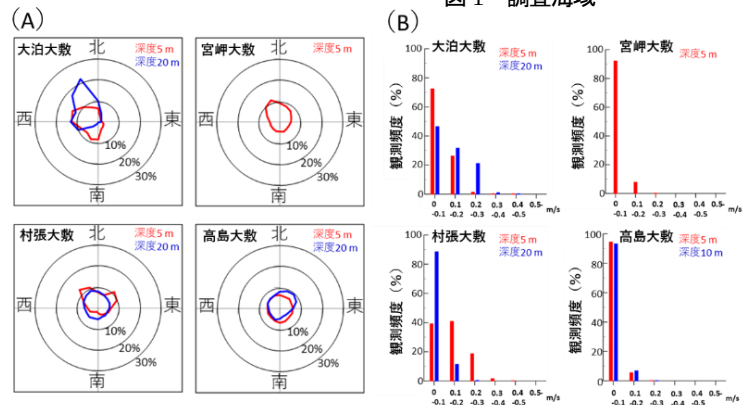


図2 定置網4ヶ統のA) 流向とB) 流速値のヒストグラム

(令和元年10月28日～令和2年3月31日)

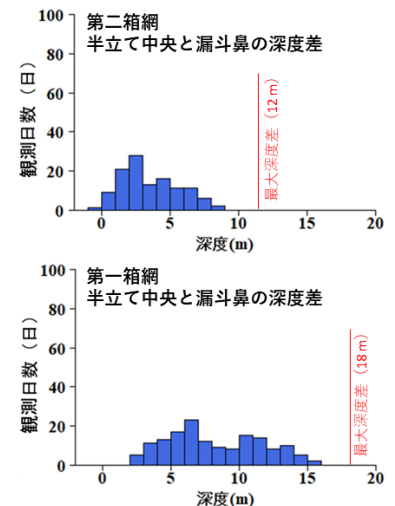


図3 大泊大敷の箱網の吹き上がり